

報告・資料

「箱庭－物語（サンドプレイードラマ）法」を 喪の仕事に役立てるための一試み

小森 國寿¹⁾・菅 佐和子²⁾

An application of the Sandplay – Drama Technique to Mourning Work

Kunihisa Komori¹⁾, Sawako Suga²⁾

Abstract

This study aims to apply the Sandplay-Drama Technique to the process of mourning work relating to suicide. Authors set up a 6-session-course with 2 weeks interval between each session, and requested the participant to create sandplay works and stories based on these works. The result indicated that the course promoted his mourning work as well as the conventional sandplay therapeutic process, simultaneously. However, the setting could lead to a psychological crisis and an incomplete working through while it could also facilitate the internal process.

Key words : sandplay-drama technique, mourning work, suicide.

【問題と目的】

箱庭療法は、内側が青く塗られた縦57センチ、横72センチ、高さ7センチの箱の中で、砂やミニチュア玩具を使って自分の内的イメージにぴったりの世界を構成することで行う心理療法である（Kalf, 1966）。箱庭－物語（サンドプレイードラマ）法は、箱庭を作ってから、その作品を元に空想物語を作成する技法である（三木, 1977；東山, 1982；片坐, 1984, 1990；安福, 1990；岡田, 1993；菅, 2003；長谷川, 2011）。

箱庭と物語作りを組み合わせる意味について、東山（1994）は、箱庭制作時に無意識の内容が漏れ出すぎて支障をきたすことがあるため、ドラマを作ることによって自我を関与させ、無意識の内容を意

識化、整理、集約させて安全性を確保するためだと述べている。また、語るのではなく、筋道をたてて「書く」という方法を選んだのは、箱庭の多くの発展可能性の中から自分の内的課題を選択させるためだと言う。さらに、作品をシリーズとして見る態度は、作成者の人間としての変容や発展可能性に寄与することや、見守り手がより多面的に箱庭作品を理解することにもつながる（河合, 1969）。ここに自我を関与させることによって作成者の内的課題を動的に、かつ道筋をつけて理解することが期待される。

この技法はきわめて興味深いものだが、この技法を用いた治療報告はまだほとんど見られない。筆者らは、この技法を「治療」としてではなく、自己探求のための方法として発展させたいと考え

¹⁾ 陸上自衛隊滝ヶ原駐屯地（Japan Ground Self Defense Force, Takigahara Camp）

²⁾ 関西看護医療大学（Kansai University of Nursing and Health Sciences）

受稿2012.6.11 受理2014.10.28

た。そのため、当分は「研究」として位置づけ、『現在、自己の内界を整理、探究したいというニーズを持ち、この技法への関心を持つ健常者』を被験者として、期間（約3か月）・回数（6回）限定の体験コースを設定した。枠は、物語が集結するまでの平均的な回数（片坐, 1984）を考慮した上で、概ね四半期に沿ったリズムがある日本社会での一区切りとなる期間内で内的作業に集中できるよう設定した。ただし、物語作成にはエネルギーを費やすことが予想されたため、隔週を基準とした設定とし、回数を予め示しておくことで被験者自身が終結を見据え、自我を関与させた物語構成ができるように配慮した。なおこの枠は、第2巡以降も継続させる被験者のニーズを妨げるものではない。被験者には、「コースの終了後、箱庭および物語を研究報告として公表する」ことの同意を得ている。

今回は、「喪の仕事」を課題とした男子青年の作品を取り上げ、その課題がどのように展開したかについて考察を行い、本技法の有用性についても検討した。

ここで、喪の仕事について述べておきたい。心理的、社会的、物質的な次元で、自己の一部であると認識していた対象が主観的に失われた状態を喪失体験といい、喪失に適応していく過程のことを喪という。Freud (1917) が、喪を心理社会的な一連の過程であると論じてから、喪の過程についての様々な理論が構築されてきた。代表的なものとしては、受容に至るまでの段階を示した段階説（たとえば Kübler-Ross, 1969）や、その順序をより柔軟に捉えた位相説（たとえば Parkes, 1972, 2001, 2006；Bowlby, 1980）などがある。近年では、喪の過程は自動的に進むものではなく、適応への課題に積極的に取り組むことが必要だとする課題説（Worden, 2008）も見られている。

箱庭－物語法における物語作成は、従来の箱庭療法での治癒力だけでなく、内的課題に対する意

識的・能動的な取り組みによる効果も期待できる。つまり、死別、特に自死や夭折といった要因を含むものは心身の健康に影響を及ぼしやすいことが知られているが、箱庭－物語法の取り組みを通した、思考と感情とが統合される（Worden, 2008）効果や、喪失対象の無い世界についての「意味の再構成」（Neimeyer, 2000, 2001）といった、喪失に適応し、心身の健康に寄与する効果である。

「箱庭－物語法」が自己探求の方法として有用であることを確認し、適切な実施方法を確立するためには、事例の集積を行う必要がある。ここでは「喪の仕事」が主要テーマとなった一事例を取り上げ、そのプロセスがどう展開していったか、箱庭を作る作業と物語を作る作業が、どうプロセスの進展に作用したか等について検討を行った。

【方 法】

作成者：B（20代後半・男性・大学院生）

時 期：X年9月～12月・約3か月

場 所：箱庭セットの設置された静かな面談室

回 数：原則として隔週、計6回

手続き：作り手は、まず自由に箱庭を作成。完成後、見守り手に場面を簡単に説明し、デジタルカメラで撮影、画像を持ち帰った。次回までに、その画像を題材として空想物語を作成、紙に記載し見守り手に手渡した。各回は、全て隔週での等間隔だった。ただし間隔の枠は、病気や冠婚葬祭等による時間や曜日をずらすことを妨げるものではない。見守り手は、経過中にはとくにコメントやプロンプトをせず、全6回終了後、箱庭の写真と物語を見守り手と作り手が一緒に眺めながら1時間枠での面談を行った。見守りは、筆者1が担当。筆者2は、必要に応じて筆者1への助言・指導を行った。

【結 果】

全 6 回の箱庭—物語に加え、第 1、2 および 5 回では詩歌が創作された。それらを通して展開されたのは、自死をした恋人 A に対する喪の仕事である。作り手 B による箱庭作品および物語・詩歌の一部を以下に示す。物語は、作り手の許可を得た上で内容に支障がない程度に編集・省略してある。面接プロトコルから得られた B による主観的なテーマ、そして筆者による意識水準および無意識水準における変容の解釈は表 1 に示した。なお、物語中のカギカッコ「」は直接的な会話、墨付きカッコ【】は電子メール等での間接的な会話を示す。

〈第 1 回〉

箱庭 1



写真 1 箱庭 1

物語 1

「空を飛んで、遠くに行けるような気がするんだよね。」

青い空を見るたびに A はそう呟いて、遠くに広がる空を見上げていた。

少しだけ、遠くに目を向けて A は息を吐く。一瞬、悲しそうな顔をしたかと思うと笑顔になり、こう A は言う。

「自然がたくさんあるところに行きたいの。私も自然になりたい。」

「自然？自然なんてほら、そこら中にあるじゃない。」

僕は、そばにあったキンモクセイの木を指差して言う。

「分かってないな B は。自然はもっと光ってるんだよ。」

首を傾げてみせる僕に A はまた笑いかけて言う。

それから間もなく、A はいなくなった。あまりにも突然だったけど、さほど驚かなかった。でも、ぼんやりしていると、寂しくて仕方なくなってしまい、次から次へと泣きたくなった。

目を閉じれば、君がいる。近くで笑っていた君はどんどん離れ、青になる。川を隔ててしまった後ろ姿は、幸せそうで、泣いているようで。

「もうすぐ、キンモクセイが香る季節だな。」

ふと、そう考えて、また泣きたくなった。

表 1 箱庭・物語のテーマ一覧

	作り手による主観的なテーマ	意識水準	無意識水準
第 1 回	“自然”になった恋人の回想	喪の仕事に向けての準備	個性化への旅立ち
第 2 回	檻の中での苦しみに手を出せない歯がゆさ	故人への怒り	変化に向けての「籠り」
第 3 回	嵐の海を航海する恋人とパラレルの世界に住む自分への気づき	抑圧・否認	変容のはじまり
第 4 回	死ぬことを望む恋人に吹く風を想像する自分	否認と受容の葛藤	アニマの誕生
第 5 回	自死をした恋人を思い、湧き上がる悲しみと安堵	感情の麻痺と悲しみ	アニマの成立
第 6 回	安定の場所となった墓で再び感じる不安定さ	故人との新たな繋がり	統合・個性化

〈第2回〉

箱庭 2

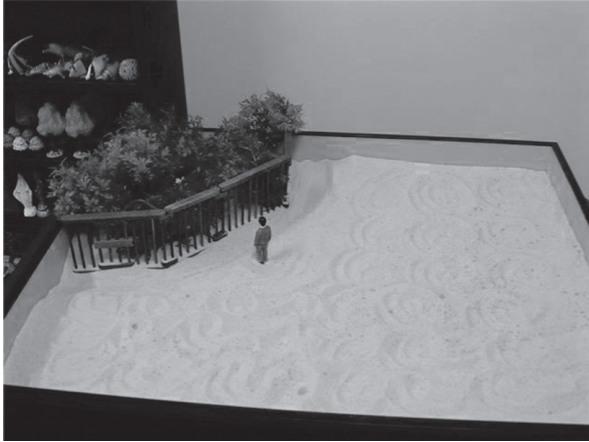


写真 2 箱庭 2-1



写真 3 箱庭 2-2

物語 2

Aはいつも遠いところにいるような人だったが、次第に、だけど確実に僕たちが一緒にいられる場所からは遠ざかっていった。

大好きな人がこんなに苦しんでいるのに。なんとかしてあげたいと思えば思うほど、何もしてやれないことに気付いた。ちょうど、檻の中で苦しむ人に手を伸ばすように。

「もう、いいよね。自分が惨めになるの。」そう言うAを、僕は怒りと悲しみが入り混じったような気持ちで眺めることしかできなかった。深い森に沈んでいく、好きな人を。

Aは祈っていた。「楽になりますように」と祈る

ほどに、彼女と僕との世界は離れ、彼女を思うほどに彼女を閉じ込める檻が強固であることが分かってしまう。

「うまくいかないもんだね。」

僕は呟き、彼女が答える。

「うまくいかないよね。」

〈第3回〉

箱庭 3



写真 4 箱庭 3

物語 3

最近Aとめっきり顔を合わさなくなった。家に行ってみても「調子が悪いんだ」と言って、扉を開けようとしな。扉の向こうから感じられる雰囲気には、嵐が吹き荒れていた。

散ったキンモクセイを見ながら歩いていると、携帯電話のバイブが鳴った。Aからのメール着信だった。

【この世界と融合できればいいのに。】

僕はとまどいながら、その意味を尋ねる。

【しいて言えば、死ぬことに近い。】

【まだ分からないよ。】

少しの間が空いて携帯が鳴った。届いたのは、何の文字も入っていないメールだった。それだけでとても伝わってきたような気がして、彼女の世界に入れないことが分かる。

〈第 4 回〉

箱庭 4

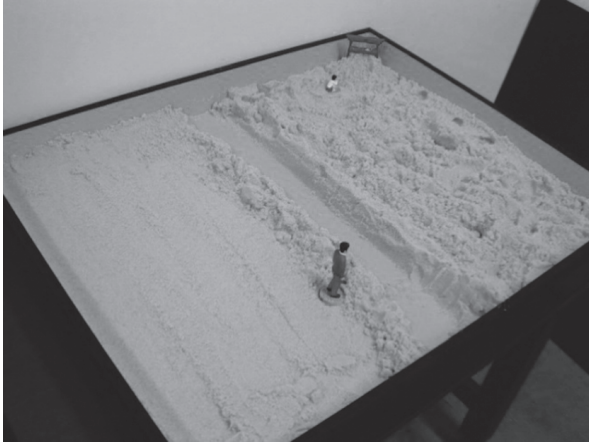


写真 5 箱庭 4

物語 4

「今回も、神様は受け入れてくれなかったよ。」
久しぶりに会った A は、うつろな目をして抑揚なく言う。これで 3 回目の自殺未遂だった。普通通りに話せる時と、僕には分からない恐怖に顔を歪める時とを繰り返す A を見ると、色々な気持ちが混じりあって、訳が分からなくなる。

「ねぇ B。死んだ後には何があるんだと思う？」

「・・・どうだろう。分からないよ。たぶん、天国と地獄かな。」

「私はね。何も無いと思う。死んだらそれでおしまい。何も無くなって、終わるの。」

しばらくの沈黙があって、A が言う。

「死ねなかったよ。」

「うん。」

まるで僕は、遠くからの声を聞いている気分だった。

〈第 5 回〉

箱庭 5

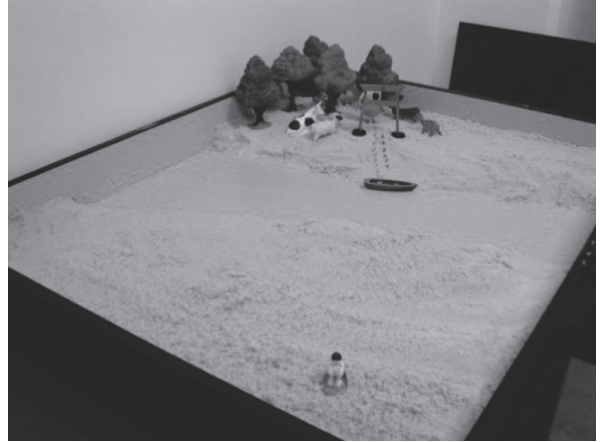


写真 6 箱庭 5

物語 5

突然、携帯電話が鳴った。知らない番号からの着信にためらいつつ電話をとると、50代くらいの男性の声。

「突然申し訳ありません。私、A の父親なんですが、お知らせしたいことがあってお電話差し上げました。先日、A が亡くなりました。」

思っていたほど、狼狽はしなかった。狼狽するには、悲しすぎたのかもしれない。

次の日、喪服を着て A の実家に行くと、一気に 10 歳も歳をとったように見える A の母親が出迎えてくれた。線香の匂いが一際強い部屋に案内され、ふすまを開けると、大きな中陰壇。その前に座り、A が元気な頃の遺影と対面する。空を眺めて、飛べるような気がすると笑っていた頃。久しぶりに見る A の笑顔を前に、線香をあげて、手を合わせる。

「なあ、A。よかったのかなあ。」

そう呟くと、まるで腹の底からわきあがってくるみたいに涙が止まらなくなった。情けなくなるくらいに。

ついに君は空を飛んだ
飛べるかもね
そういった君は
青く晴れた日に空を飛んだ

君の体を作った散り散りは
それぞれが自由になり
散り散りに空を飛んだ

一つの君は北へ飛び
一つの君は南へ行く
遠くを焦がれた君は風に乗り
見上げた空になって地球をまわる

ついに君は空を飛んだ
青が好きだと
そう言った君は
青く晴れた日に青になった

図1 第5回に作成した詩歌

〈第6回〉

箱庭6



写真7 箱庭6

物語6

Aのお墓があるお寺までの道のりを歩いていると、嬉しいからか、悲しいからかは分からないけど、胸が熱くなりながら凍りつくような感覚がある。視界に墓が入り、刻まれたAの名前が見えると、ホッとしたような気持ちになって、時間がまた流れはじめる。

墓の前に立ち、数秒の沈黙。

「誕生日、おめでとう」

生きていれば、28歳になるはずだったAに話しかける。

「もう、何年も経つんだな。早いな。」

そう言うと、突然悲しくて仕方なくなって、しまったな、と思いながらひとしきり泣いた。

死んだ人の誕生日を祝うなんて、バカバカしいことだと思う。半分以上は自分のためで、誕生日や命日なんて、ここに来る口実に過ぎないんだろう。それでも僕は、いつもそこにある墓に、安心を得る。好きな人がいる場所に。

「もう、行かなくちゃ」

別れを告げて、Aにキスをする。

空を見ると、さっきまであった雲がなくなって、ずっと続く青空になっていた。

【見守り手と作り手の面談プロトコル】

1、体験への感想

恋人の死から、漠然とした悲しみが整理されないままに気持ちに混乱が生じることがあり、わかまる気持ちを何らかの方法で表現したいという思いが前からあった。研究の目的と手法の説明を受け、際限なく動く感情と自らの内面に向き合う絶好の機会であると考え、受諾することとした。見守り手の存在によって、安心して作業に専念できた。

2、箱庭と物語による表現の質の違い

箱庭では、内面的に持つイメージを比較的そのままの形で表現できた。様々な感覚の複合として存在する心的イメージを、砂の感触などとともにより質感をもって表現できた。しかし、心的イメージはしばしば4次元的にもなりうる。それを3次元の世界に起こそうとすると、ある程度の妥協をせねばならなかった。

他方、物語は思い通りに動かない場合もあった

が、不規則にあった気持ちや思いに理解できる枠をつけ、内的世界をより客観的に見つめることを可能にした。

3、回数が制限されていること

膨大に思えた体験を 6 回の枠内に収めるのは、難しく思えた。しかし制限があったために、最も語りたいイメージを選別しながら意識にのぼらせ、向き合うことのきっかけになった。全てを語り切れたわけではないが、感情に整理をつける一歩になったのではないかと思う。

【考 察】

作り手 B は、大切な対象である A を自死という形で喪い、その衝撃や哀惜の念を自分のところに納めることに苦慮していた。そのような折に、筆者らが箱庭－物語法の研究協力者を求めていることを知り、自分の気持ちの整理と癒しに繋がればと考え、参加を決意した。筆者らは、箱庭－物語作りが B の苦しみを深めることになってはと危惧したが、B 自身の自我の強さや知的能力に一定の信頼が置けること、必要が生じれば治療的介入が可能であること等を考慮し、「喪の仕事」を見守ることにした。

ここでは、箱庭－物語の 6 回の流れに沿って、解釈を進めたい。概観すると、箱庭作品ではより無意識に近い水準での表現、そして物語作品ではより意識に近い水準での表現がパラレルになされているようであった。

なお、箱庭の解釈は作り手自身の体験的意味に加え、ユング心理学における拡充法をもとに行われることが一般的である（木村、1985）。拡充法では比較宗教学や比較民俗学、神話や昔話の研究から得られた元型的イメージをたどり、人類にとって普遍的な象徴性にたどり着く。このような解釈のあり方にはマニュアル化されたものは無く、先

行研究（たとえば Kalff, 1966；河合, 1969；三木, 1977；片坐, 1984, 1990；木村, 1985；安福, 1990；Rice-Menuhin, 1992；岡田, 1993；東山, 1994；菅, 2003；岡田・皆藤・田中編, 2007；織田・大住, 2008；大前, 2010；長谷川, 2011 など）を参考にしながら作り手と見守り手の関係を母胎にして進めるものであると Kalff（1966）は述べている。

〈第 1 回〉

第 1 回の箱庭では、個性化に向けての旅立ちを思わせる場面が作られた。作品を見ると、中央からやや左より上方にある滝から作られる川によって、世界が二つに隔てられている。一体のフィギュアが死の方向（Koch, 1957）にある無意識の森に向かっているが、東山（1994）によると、それまでいた場所を離れて、何が潜んでいるかわからない森に向かうことは、新たな心理的課題に取り組むことを示すという。

森に向かうフィギュアが物語の A でもあると考えると、作成者の心の中にあるアニマ（女性像）が表現されているのかもしれない。周りの色とりどりの珠は、女性性と深い関係があることも東山（1994）は示唆する。男性である作り手が自我にアニマを取り入れることは、グノーシス思想に述べられる両性具有性を達成することにも繋がるが、そのためには「死と再生」を経なければならぬ。川の両岸に布置されている 2 体のフィギュアが示す苦悩の表情は、現在ある自我の「死」と、新たな自我の「再生」を予想しての苦しみを表しているのかもしれない。

物語では、A の死が描かれている。「自然になった恋人」は今後 B の心の中での居場所を見つけられる必要がある。しかし、自死による喪失に向き合うことには相当の困難が伴う。喪失対象の肯定的側面について語ることが、その後に生ずる否定的側面を味わう支えになることを Worden（2008）は述べているが、喪の仕事に向けての準備として

Aとの思い出が物語にも描かれているのかもしれない。喪の仕事における第一の課題である「喪失の現実を受け入れること」（Worden, 2008）は第5回でより詳細に語られることになるが、第1回の段階で既に触れられていることが特徴的である。このことは、6回で物語を終結させることが予め示されていたために、喪の仕事が前倒しされて進められたのではない。時間的制限によって変化が急がれる現象は先行研究でも認められている（片坐, 1990；東山, 1994；長谷川, 2011）。しかしこれは、危機状態にも繋がりをうめるものであるため、一度に向き合えるだけの感情を扱うような「適量対処」（Worden, 2008）の配慮も必要になるだろう。

〈第2回〉

第2回の箱庭で表現されているのは、変化に向ける「籠り」であろう。無意識の森は、過去、ないしは受動性に向かう領域（Koch, 1957）に移っており、統合が行われる過程での「領域の反転」（河合, 1969）が起こっている。森の中に籠る子どもは「眠り姫」を連想させるが、アニメが子どもとしての死を経て、女性としての再生を遂げるのであろうか。個性化の課題を促進しつつ自我が崩壊しないよう守りとなる予備的なマンダラ（東山, 1994）からも、籠りを経て成熟したアニメが自我へと統合されていく過程が予想される。ただし、森の中にいる蛇は「すべてのものを成熟と完成に至らしめる原理」（Jung, 1944）であると同時に、内的課題に痛みを伴うような干渉をしてくるともRyce-Menuhin（1992）は述べており、課題を乗り越えることが容易ではないことが想像される。

物語ではAに向けるBの怒りがテーマとなっている。喪の仕事での第二の課題は「悲嘆の痛みを消化していくこと」（Worden, 2008）である。Jordan（2001）は、「あの人は、なぜ自殺したのか」「なぜ私は自殺を防げなかったのか」「どうしてあの

人は私をこんな目に合わせるのか」という自死による死別に特徴的な3つの主要なテーマを見出している。こういった答えの無い疑問にまつわり否定的な感情が生じるが、第2回の作品からは無力感や怒りなどが読み取れる。怒りや攻撃性といった感情は、自尊感情の低下とも関連するとWorden（2008）が述べる一方、菅（2003）によると内的な変容を促すエネルギーの源でもあるという。箱庭作品ではマンダラや鉄格子、物語作品では詩歌という守りによってエネルギーがコントロールされている点は、今後の肯定的な変容を予想させる。

〈第3回〉

第3回の箱庭のテーマは、変容の始まりであろう。籠りは続いているが、船の出航からは無意識のエネルギーが動きはじめていることが分かる（Kalf, 1966）。アニメは籠りながら無意識の海を探索しており、変容過程の途中にあることが示唆される。作成者自身が投影されていると考えられる男性のフィギュアは、作品2の時よりも無意識領域から距離をとって置かれている。鉄格子が木製の柵に変わっていたり、マンダラが消えていたり、作品2よりも守りが少なくなっているために、無意識の世界との交流が容易になっている一方、無意識で起こる変容の荒々しさから距離を取らざるを得ないためだろうか。

物語では、抑圧ないしは否認が起こっているようである。死が描かれつつも、感情の動きはほとんど無く、直接的なAの姿も描かれていない。第2回でのAに対する否定的な感情に耐え切れなくなったの反応なのかもしれないが、意識から締め出されたままの喪の仕事は精神状態の破綻に繋がりをうめるため、最後まで慎重なモニタリングが必要だろう（Bowlby, 1980；Worden, 2008）。

当時の作り手からは若干の気持ちの波も報告されていたが、社会生活は送れており、ソーシャル

サポートも期待できる状況だった。作り手に継続の意味もあったことから、そのまま経過を見守ることとした。

〈第 4 回〉

第 4 回の箱庭では、アニマの誕生があらわされている。「領域の反転」や境界線の消失からは、変容や統合の過程が進んだことが示唆される。また、男性のいる岸と女性のいる岸がうっすらと繋がっている構図からは、結合を経て国生みを成し遂げるイザナギとイザナミの邂逅を連想させる。しかし、籠りが明けたばかりのアニマは未だ弱々しい少女の姿で描かれており、箱庭全体としても意識と無意識との境界が不安定になっている。折り返しの回で回数の制限を意識してか、強引にでも籠りから出てこなくてはならなかったのだろう。箱庭での感覚的な表現が、物語を通してイメージから意味へと明確化されるプロセスは、一人ひとりの神話（長谷川, 2011）や自身の総合的掌握（三木, 1977）をもたらす。しかし、物語は生成されるまでに相当の熟成期間を要する（三木, 1977；長谷川 2011）。さらに、長谷川（2011）が指摘するように、機が熟さない意味化や意識化には危険が伴うのかもしれない。そんな危機の中、少女の側に置かれた鳥居が変容と統合を見守る強力な安心材料である。

物語においては、否認と受容との間でのアンバランスからの不安定さが描かれている。A は再び姿を見せるようになり、死や精神病が直接的な表現で描かれるようになった一方で、B の感情の揺れ動きは抑圧されている。しかし、故人の喪失につながる表現が徐々に明確になってきたことは注目に値する。喪失やそれに関連する事象に意識を向けられるようになったことは、行動の変容でもあり、そうすることによって喪失を現実のものとして捉えることにつながるからである（Worden, 2008）。

〈第 5 回〉

しゃがんだ少女が成熟した女性に変化していることから、第 5 回におけるテーマはアニマの成立であろうか。それと同時に、過去を表す箱庭の左側にある対岸には少女性を取り残されている。変容前の姿は諦めつつも、それを消し去ってしまうのではなく、心の中での居場所を見つけてやるのが今後必要になってくるかもしれない。女性は鳥居を神の使者でもある 4 匹の動物たちに導かれながらくぐっている。Jung による四位一体の考えにおいては、4 という数字は否定的な部分をも含めた統一性や統合性の象徴でもある。神域にある珠に向かって歩く女性は、個性化や、神性との統合を示すヌミノース体験を連想させる。

物語では、A の死を取り扱う儀式的な内容となっている。第 1 回の物語では「いなくなった」と、死を連想させるのみの描写だったが、第 5 回では明確に「亡くなった」という表現で現実世界での対象を諦める区切りが描かれている。物語上で喪失にともなう感情の麻痺や悲しみなどが言語化されるなど、悲嘆の痛みを消化する課題に取り組んでいるようである。感情を麻痺させることは、喪の仕事においては不健康な反応とは捉えられていない（Parkes & Weiss, 1983）。むしろ湧き出る感情を自身が処理しうる量に調節する働きがあるのかもしれない。ただし、故人の常軌を逸した行動や自殺企図が、自殺によって終焉を迎えたことによる安堵（Hawton & Simkin, 2003）は、罪悪感にも繋がりを（Worden, 2008）。このことは、抑うつ的な感情を引き起こすこともあるため、注意が必要である。

〈第 6 回〉

第 6 回の箱庭が表現しているのは、統合ないしは個性化であろう。アニマと男性が統合されているだけではなく、それぞれがいた領域が統合された大地になっている。また、半円をなすように布

置された木が、個性化を象徴するマンダラを形成していることが印象的である。墓石を境界とした箱庭上方3分の1には神的な領域が広がっており、天地を繋ぐ使者である鳥（Ryce-Menuhin, 1992）が羽ばたいている。また、女性性はつなぐ機能を持つと東山（1994）は述べているが、自我に統合されたアニマが意識の世界と無意識の世界とを繋ぎ、対話を可能にしているのかもしれない。

物語では、「故人との永続的な繋がりを新たに見つけ出す」ことが表現されているように思える。数年の時間経過を経て、Aのイメージは、追悼するにふさわしい墓地に移動され、墓がBにとっての「安心を得る」場所になっている。喪の仕事が終盤に差し掛かっていることの指標の一つとして「故人のことを苦痛なく思い浮かべることができる」（Worden, 2008）ことが挙げられているが、安心感のあるAとの新たな交流の在り方を見つけたBも、この段階に近づいているのではないか。すなわち、心身の健康に影響を及ぼす苦痛の低減だけでなく、死別体験を自己の一部として取

り入れ、心的な成長を得ることにも繋がりをうる。

【結 論】

本事例では、箱庭－物語法が喪の仕事を促すことが示された。しかし、喪失の意味やその裏側にある獲得に気づき「故人のいない世界に適応する」（Worden, 2008）段階を経ずに物語が締めくくられている点も見逃してはならない。回数や期間の制限が喪を促進する一方、箱庭－物語法の終了を目前にし、区切りをつけざるを得ず、語りきれない部分が残されてしまう可能性も示唆された。

また、作り手の個性化の過程もまた同時進行的に進むことが確認された。すなわち、自我を積極的に関与させる箱庭－物語法においても、無意識の水準での変容が起こる可能性が示唆された。但し、これは一例報告であるため、今後は、これらの知見を活かしつつ更なる事例の集積を通して考察を進めていきたい。

【文献】

- Bowlby, J. (1980). *Attachment and loss: Vol. 3. Loss: sadness, and depression*. New York : Basic Books.
- Freud, S. (1917). Mourning and Melancholia. *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud, Volume XIV (1914-1916) : On the History of the Psycho-Analytic Movement, Papers on Metapsychology and Other Works*, 237-258. (井村恒朗 (訳) (1970). 悲哀とメランコリー フロイト 著作集 第 6 巻 自我論・不安本能論 人文書院, 137-149)
- 長谷川千紘 (2011). 箱庭療法における物語作り法の検討. *箱庭療法学研究*, 24 (3), 35-51.
- Hawton, K. & Simkin, S. (2003). Helping people bereaved by suicide. Their needs require special attention. *British Medical Journal*, 327, 177-178.
- 東山紘久 (1982). 遊戯療法の世界—子どもの内的世界を読む 創元社
- 東山紘久 (1994). 箱庭療法の世界 誠信書房 pp. 9-120.
- Jordan, J. (2001). Is suicide bereavement different? A reassessment of the literature. *Suicide & Life-Threatening Behavior*, 31, 91-102.
- Jung, C. G. (1944). *Psychologie und Alchemie*. Rascher-Verlag. (池田紘一・鎌田道生 (訳) (1976). 心理学と錬金術 人文書院)
- Kalff, D. M. (1966). *Sandspiel*. (河合隼雄 (監訳) (1972). カルフ箱庭療法 誠信書房 山中康裕 (監訳) (1999). カルフ箱庭療法 [新版] 誠信書房)
- 片坐慶子 (1984). サンドプレイ・ドラマ法の試験的適用—ドラマについて— 大阪教育大学障害時教育研究紀要, 7, 61-69.
- 片坐慶子 (1990). サンドプレイ・ドラマ法の試験的適用—自分らしく生きられなかった女子大生の事例を通して— *箱庭療法学研究*, 3 (2), 79-91.
- 河合隼雄編 (1969). 箱庭療法入門 誠信書房 pp. 31-45.
- 木村晴子 (1985). 箱庭療法—基礎的研究と実践 創元社 pp. 11-55.
- Koch, C. (1957). *Der Baumtest ; der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel 3 Auflage*. Bern:Huber. (岸本寛史ら (訳) (2010). バウムテスト [第 3 版] —心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究 誠信書房 pp. 19-54.)
- Kübler-Ross, R. (1969). *On death and dying*. New York : Macmillan.
- 三木アヤ (1977). 自己への道. 黎明書房.
- Neimeyer, R. (2000). Searching for the meaning of meaning : Grief therapy and the process of reconstruction. *Death studies*, 24, 541-558.
- Neimeyer, R. (Ed.). (2001). *Meaning reconstruction and the experience of loss*. Washington DC : American Psychological Association.
- 織田尚生・大住誠 (2008). 現代箱庭療法 誠信書房
- 岡田康伸 (1993). 箱庭療法の展開 誠信書房
- 岡田康伸・皆藤章・田中康裕編 (2007). 京大心理臨床シリーズ 4 箱庭療法の事例と展開 創元社 pp. 97-256.
- 大前玲子 (2010). 箱庭による認知物語療法—自分で読み解くイメージ表現 誠信書房 pp. 2-23.
- Parkes, C. M. (1972). *Bereavement : Studies of grief in adult life*. New York : International Universities Press.
- Parkes, C. M. (2001). *Bereavement : Studies of grief in adult life (3rd ed.)*. Philadelphia : Taylor & Francis.
- Parkes, C. M. (2006). *Love and loss : The roots of grief and its complication*. New York : Routledge.
- Parkes, C. M. & Weiss, R. (1983). *Recovery from bereavement*. New York : Basic Books.
- Ryce-Menuhin, J. (1992). *Jungian Sandplay : The Wonderful therapy*. London:Routledge. (山中康裕 (監訳) (2003). 箱庭療法—イギリス・ユング派の事例と解釈 金剛出版 pp. 38-107.)
- 菅佐和子 (2003). サンドプレイ・ドラマ法を用いた自己探求の一試み—現代女性の攻撃性と親娘関係について— 京都大学医療技術短期大学部紀要, 23, 13-22.
- Worden, J. W. (2008). *Grief Counseling and Grief Therapy : A handbook for the Mental Health Practitioner. Fourth Edition*. New York : Springer

Publishing Company.（山本力（監訳）（2011）. 悲嘆
カウンセリング—臨床実践ハンドブック 誠信書
房pp. 5 -202.）

安福純子（1990）. 箱庭療法に関する基礎的研究（第
2 報）—サンドプレイ—ドラマの検討— 大阪教育
大学紀要 第IV部門, 39（1）, 171-181.